

事故防止に向けた安全対策

【 ボクシング 】

1 競技特性

ボクシングは、グローブをつけ、身体に直接攻撃をして競う合う競技である。しかし、単に腕力のみでグローブを振り回すだけのものではない。基礎となるものは、攻防技術のバランスであり、自己の感情をコントロールできる冷静な心を必要とする。また、フェアプレイの精神を身につけるとともに、競技ルールを正しく理解すること、健康管理や安全性を確保することが大切である。

ボクシングは格闘技として危険なイメージがあるが、定期健診・毎試合ごとの健診・試合中試合後のドクター健診の実施など安全面に十分配慮して行われている。そういった中において、年齢や身体等の発達段階を踏まえ、心身の鍛錬を目指していくものである。

2 想定される事故事例と予防策

(1) 主として【施設・設備・用具】が要因となって起こる事故

想定される事故やけがの原因（事例）	傷害例	予防策
・リング内の床に損傷箇所がある。(あるいはリング以外の練習場の床に損傷箇所がある)	捻挫、足の突き指、転倒	普段から床をよく点検する。清掃時に点検するのが有効。
・劣化したグローブ、ヘッドギア	顔面・頭部外傷、脳震盪	購入から3年を経過したグローブ及びヘッドギアは使用しないことを原則とするが、やむを得ず使用する場合は状態をよく確認する。
・照明の明るさ	脳震盪	照明はできる限り明るくする。特に昼間などでも天候が悪いときは、照明を多くつける。
・足に合わないシューズ	捻挫、足裏のマメ 転倒	自分の足にフィットしたシューズを着用するよう指導する。
・練習スペースが狭い場合、選手同士の足が絡み	転倒	実践練習をやるときには、ロープでくくり、境界線をつくる

(2) 主として【活動内容】が要因となって起こる事故

想定される事故やけがの原因（事例）	傷害例	予防策
・先天的に脳にダメージを受けやすい人が、打撃を受け倒れる。	頭部外傷、脳震盪	開始前にCT検査を義務づけている。基準を満たさない選手には、試合も練習時のスパarringもさせない。
・実力差による不必要な打撃をうけ、倒れる	頭部外傷、脳震盪 骨折	練習開始後、一定の期間を設け、基礎体力・筋力、技術を身につけてから、条件付きのパートナー練習をする。その後、状況を見ながら実践を始める。指導者のいない場合のスパarringはさせない。
・強打を受けたり、相手の頭が強く当たったりすることによって起こる	顔面外傷、鼻骨骨折 眼窩底骨折、脳震盪	技術レベルに差がある選手との練習を避ける。バンテージ、カップ、ヘッドギア、マウスピースは必ず着用し、グローブも完全なものを使用する。

<ul style="list-style-type: none"> ・長時間の高温、多湿下での練習や試合で起こる 減量による ・長期間の練習によって起こる ・劣化したサンドバッグや ミット、グローブを使用することによって起こる 	<p>熱中症</p> <p>疲労骨折、腰痛、膝痛</p> <p>拳の打撲 中手骨頸部骨折</p>	<p>水分、塩分の確保に努める。水分補給をこまめにさせる。練習場の温度や湿度に注意する。無理な減量をさせないで、計画的に減量をさせる。</p> <p>選手の体調管理に常に気を配る。</p> <p>劣化したものを使用しない。</p>
---	--	---

(3) 主として【環境条件等】が要因となって起こる事故

想定される事故やけがの原因（事例）	傷害例	予防策
<ul style="list-style-type: none"> ・ロードワーク時に起こる落雷事故 ・地震による器具等の落下 事故 ・Jアラート発令時の対応 	<p>火傷、感電死</p> <p>打撲</p>	<p>気象情報を確認し、雷発生の兆候がある場合にはロードワークをしない。</p> <p>サンドバックやリングの金具を定期的に緩んでいないか確認をする。地震の際は、速やかにリングやサンドバックから離れる。</p> <p>発令時の対応や様々な場面での避難方法について確認し、事前に参加者等に周知しておく。また情報収集の手段や、関係者および保護者等との連絡方法について準備しておく。</p>